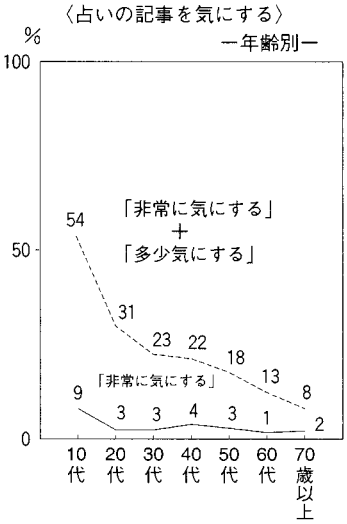
るけれども、女子高校生の約四人に一人の割合で「占い師に見てもらったことある」ということは決して小さい数値であるとは思われない。これらのことから、女性および（もしくは）若年層が占い師に見てもらうことが多くなりだした時期とは何時なのであろうかという問題がでてくる。

この問題を傍証する資料として雑誌記事ないしその見出しがある。『大宅壮一雑誌記事事件目録』に掲載されている「客」の特徴、とくに若年層の特徴を表す見出しを図表にすると図表6になる[18]。ここから、女性および（もしくは）若年層についての表現が顕著になるのは一九八〇年代の中盤以降であることがわかる。確かに一九七〇年代にも「慶大卒のハンサム易者（26才）への若い女性の凄い相談内容！（『ヤングレディ』1974.8.1・5合併）」などの見出しをみることができる。しかし、一九八〇年代の中盤以降の見出しは明らかに若年化する。その典型的な見出しが「ルポ　占いに集う少女たち（『朝日ジャーナル』1987.2.20）」である。一九七〇年代において客の特徴が見出しにのっている件数は16件であるが、しかしそのうち若年層を示すものは上のような例を含めても3件しかない。それに対して、一九八五年から一九九五年にかけては54件中29件に達している。そして、上で引用した『週刊ポスト 1987.3.27』の記事のように、ひとつの記事のなかで＜占いの街＞という占い空間と若年層の客とは同時に記述される傾向があるのもみることができる。まさに、＜占いの街＞という占い空間が世間の注目を浴びたした時期と、若年層が占いを需要する時期と

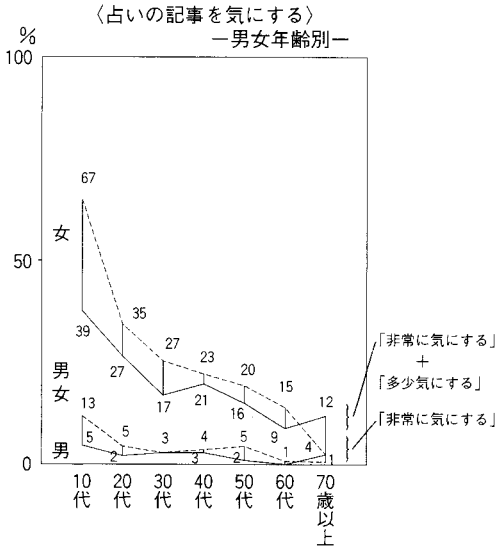
図表5

「あなたは、つぎのようなことを、どの程度、気にしますか。『新聞や雑誌などの占い記事』についてはいかがでしょう。」NHK世論調査部　一九八一年	
非常に気にする	3.4%
多少気にする	20.5%
あまり気にしない	46.5%
全く気にしない	29.1%
わからない，無回答	0.4%
合計	100.0%

図表5－A



図表5－B



（NHK放送世論調査編『日本人の宗教意識』日本放送出協会　一九八四年）

18）『大宅文庫』大項目「宗教・思想」、中項目「易占」、小項目「易術一般」に限定。